



第211号
発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主 な 内 容

- ② 退任あいさつ／新任あいさつ／第77回 京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の慰霊
- ③ 校友会・KMSIFUNDだより
- ④ 支部だより「京都」「三重」
- ⑤ 支部だより「福井」「島根」
- ⑥ 医学部学生への助成募集の再開／芝蘭会会員名簿の刊行／人事異動・会員訃報

2023年を迎え、芝蘭会員の先生方におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。また、昨年は京都大学創立125周年記念事業に多大なご協力を賜りましたこと、心から御礼申し上げます。

コロナウイルス対策に追われた日々

さて私、昨年9月末で4年間務めました医学研究科長・医学部長を退任致しましたが、私の任期の半分以上の期間は「新型コロナウイルス感染症への対応に追われた」と申しても過言ではございませんでした。2020年1月に日本に新型コロナウイルスがもたらされ、COVID-19パンデミックが始まって3年になるうとしております。

当初は、医学研究科・医学部では教育のみならず、研究も大きく毀損しました。一方で、医学部附属病院は、職員に対して思い切った行動制限を導入する

令和5年 新年のはじまりによせて

「国際卓越研究大学」の認定を視野に、環境整備と研究者支援の充実を



芝蘭会会長
理事・副学長
(企画・調整、
附属病院担当)
岩井 一宏

ことで、できる限りの高度医療を維持しつつCOVID-19にも対応をされたことは、本当に素晴らしいことだと思っております。COVID-19パンデミックが

長引くにつれ、治療方法なども徐々に確立されるとともに、生命科学の発展でもたらされた新たなモダリティであるmRNAワクチンの接種が進んだことも相まって、教育研究活動は徐々に正常化して参りました。本年度からは、文部科学省の指導もあり、医学研究科・医学部も含め、京都大学での講義、実習は原則的に対面で行っております。

原因ウイルスであるSARS-CoV2も変異を繰り返して、現在流行しているウイルスは、感染力は強くなっていますが、症状は軽くなっているようです。そのような状況を受けて、欧米を中心に行動制限が解除され、日本でも外出自粛が解除されて、経済活動の活発化に舵を切りま

した。秋の観光シーズンには水際対策の緩和もあり、京都には外国人も含め多くの観光客が訪れました。

しかしながら、感染者数は減少しておらず、医療機関には大きな負担がのしかかっております。芝蘭会員の皆様はほとんどは医療機関で従事しておられますから、おそらく今後も厳しい行動制限のもとで、COVID-19だけではなく、地域の通常医療を確保するためにご尽力されていることと存じます。医療機関、医療従事者に過重な負担が強いられている状況は理不尽に感じますが、確固とした政策が待たれるところでです。

世界に伍する研究大学をめざして

芝蘭会の皆様もご存じのことかと存じ上げますが、日本の大学を取り巻く現状は大きく変化しております。政府が10兆円の大学ファンドを準備し、その運用益を主な原資として、ごく少数の大学に年間数百億円の助成金を原則25年間交付して支援する「国際卓越研究大学制度」が始まろうとしております。

方で、大学の事業規模の3%以上の成長と5%以上の寄付金の増加が求められます。

京大は2番目の帝国大学として創立され、2022年に創立125周年を迎えました。官史の育成などを目的に設立された東京大学とは異なり、学術研究を主目的として設立されました。そのような経緯もあり、京大は学生、研究者の自主性を尊重する「自由の学風」を特徴として、真理の探究を求める優れた研究を展開してきた研究大学です。応用研究ではなく、じっくりと基礎研究に取り組むことが大きな特徴です。

国際卓越研究大学制度では、産業界などからの外部資金を獲得して成長することが求められますので、一見、京大の理念にそぐわないように感じられるかもしれません。しかし、本庶佑特別教授の免疫チェックポイント療法事例を考えると、頂ければ矛盾しないことはご理解いただけるかと思えます。

この療法は、本庶先生が基礎研究で見出された発見を育まれ、湊長博先生(現・京都大学総長)との学内での共同研究へと発展した成果が社会還元されたものです。免疫チェックポイント療法はがん治療の概念を変える大きなイノベーションですが、そのようなエポックの大きなイノベーションが生み出された契機は、しっかりとした基礎研究にあり、京都大学の真骨頂ともいえる成果だと思えます。

交付金に依存せず、自立した運営を

現在、京大が最も大切にすべきもの――研究者の自由意志、健全な好奇心に基づいた真理の探究――の実現が困難になってきております。主たる要因は研究者が研究に割くことができず、時間の激減です。運営費交付金の削減による定員削減、コンプライアンスに関する手続きの

増大にともなう人材の不足など、大学の財政の毀損がその主因です。その結果、前述のように研究手法の高度化による最新鋭の研究機器、それを使った高度な解析を行うことも十分にはできない状況におかれつつあります。

この状況を打開するには文部科学省の運営費交付に依存するのではなく、欧米の主たる研究大学と同じく、自らの基金を持ち、自主財源を活かして自立的に運営することが必要です。そして研究者の楽園となるような研究環境、研究者支援体制を実現し、その環境を活かして、多くの研究者が思う存分に研究や診療に専念できる環境を確立することが求められております。

大学ファンドによる国際卓越研究大学構想は、一部では日本の大学制度の改悪のように言われております。しかし、湊長博総長は、京大が知の発信を通して人類社会に貢献し、本来の学問の府としての大学を確立できる最後のチャンスだと考えておられます。

部局の機能強化と知の融合の推進

さて、私こと昨年10月から湊長博総長のもとで理事・副学長を務めております。湊総長からの指示を受け、国際卓越研究大学制度への申請に向けて準備を進めております。

京大の最も大きな財産は質の高い教員と学生です。健全な好奇心と高い志を持って、新たな知の創造を介して人類社会の発展に貢献するとともに、京大に在籍されている先生方に思う存分に活躍して頂ける場を提供することが、私どもの責務であると考えております。

そのような研究環境の確立に大切な点は、実際に研究を行っている医学研究科などの部局の機能強化です。一方で、近年の医学研究は、医学研究科のみならず多彩な領域の研究者との共

同研究を経て、大きな成果が生まれることが非常に多くなっております。京大には多様な領域に優れた研究者がおられます。それらの研究者の融合研究を推進できるようなシステムも導入して、研究の活性化を図ることが京都大学の発展には不可欠です。

真の「研究大学」に発展することを念じて

「対話を根幹とした自学自習」が京都大学の基本理念です。しかし、COVID-19パンデミック下では対話が十分には行えませんでした。

国際卓越研究大学構想は令和6年度から運用開始の予定です。私もでは認可に向けて最大限の努力を払っております。来年には日本もCOVID-19パンデミックから解放され、京都大学も国際卓越研究大学に採択されて、構成員の対話を通して研究などの活動を活発化させ、真の研究大学に発展して参りたいと存じております。

今後芝蘭会の先生方の医学研究科・医学部へのご支援をどうかよろしくお願い申し上げます。

令和4年度
秋の叙勲

◆瑞宝重光章

成宮 周

(昭48年卒)
京都大学名誉教授

長田 重一

(教室会員 医化学)
京都大学名誉教授、大阪大学名誉教授



*先端医療研究開発機構(iACT)
2020年4月に附属病院の5つの組織(臨床研究総合センター、先端医療機器開発・臨床研究センター、先端医療・生活習慣病研究センター、クリニカルバイオインフォマティクスセンター、次世代医療・iPSC細胞治療研究センター)を発展的に改組して設置した臨床研究支援組織。

退任あいさつ

糖尿病研究・臨床の38年



公益財団法人田附興風会
理事長

稲垣 暢也

私は2005年4月以来、17年半にわたって京都大学に在籍させていただきましたが、2022年9月30日付で退職しましたので、ご挨拶申し上げます。

私は1984年に京都大学医学部を卒業し、京大医学部附属病院において内科研修の後、田附興風会医学研究所北野病院に

研究を進め、1997年からは秋田大学医学部生理学講座の教授としてさらに基礎研究をつづけました。

そして、2005年4月より、清野裕教授の後任として、京大糖尿病・栄養内科学教授ならびに同附属病院糖尿病・栄養内科長、疾患栄養治療部長として帰学しました。基礎医学教室から臨床医学教室への転身で、当初は戸惑うことも少なからずありましたが、医学部教授会や芝蘭会の皆様のご支援により、無事に軟着陸することができました。

糖尿病研究に関して特筆すべきは、私の大学院時代の研究テーマであったインクレチンホルモンの臨床応用です。低血糖を起こしにくいインスリン分泌促進薬として、インクレチン関連薬が2009年に我が国に登場して糖尿病治療は一変しました。このようなタイミングにインスリン分泌やインクレ

チンの研究に携わることができたことは幸運でした。また、膵β細胞の非侵襲的イメージングプローブの開発を、現在臨床試験にまで進めることができたことも喜びです。そして、教室の多くの大学院生やスタッフと共に研究や診療ができたことは何よりも大きな喜びでした。

2013年9月には内科学講座の再編により、「糖尿病・栄養内科学」教室と「内分泌代謝内科学」教室が合併し、新たに「糖尿病・内分泌・栄養内科学」教室となりました。私は、この教室の教授として9年間、教室運営に携わりました。

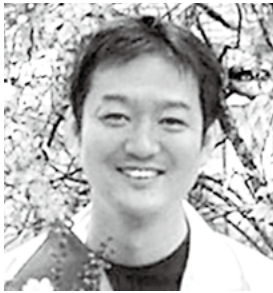
講座再編には大変なエネルギーが必要でしたが、最近の専門医制度では、サブスペシャリティ領域として、内分泌代謝・糖尿病領域が設置され、これからは内分泌領域と糖尿病領域の両方の専門性を有することが求められています。いま思えば、教室の融合は、今後これら

の分野をめざす若い医師にとっては、時宜を得たものであったのではないかと思います。

また、2015年から4年間は附属病院の病院長を務め、さらに2021年から1年半は同先端医療研究開発機構（iACT）の機構長を務めさせていただきました。この間の芝蘭会の皆様のご支援に、心より感謝申し上げます。

2022年10月より公益財団法人田附興風会の理事長に就任し、医学研究所北野病院の運営に携わることとなりました。大学卒業後に臨床医として育てていただいた病院で再び働くこととなり、不思議な縁を感じております。京大との連携が強い医学研究所北野病院において、地域医療のみならず、医学研究や人材育成に貢献できるよう尽力いたしますので、引き続きのご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

新任あいさつ

本邦における
医学物理士のグローバル・
スタンダード化をめざして

中村 光宏

京都大学大学院医学研究科
人間健康科学系専攻
総合医療科学コース
理工系医療科学講座
医学物理学分野

2022年10月1日付で京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻総合医療科学コース理工系医療科学講座医学物理学分野教授を拝命致しました中村

光宏と申します。この場をお借りしまして、芝蘭会会員の皆様方にご挨拶申し上げます。私は2004年に大阪大学医学部保健学科放射線技術学専

攻を卒業し、2006年に同大学院医学系研究科保健学専攻医療技術科学分野修士課程を修了致しました。同年4月から縁あって京大大学院医学研究科に進学し、医学専攻放射線腫瘍学・画像応用治療学の博士課程でお世話になることになりました。

在学中は平岡眞寛名誉教授や溝脇尚志教授をはじめ多くの先生方からご指導を賜り、2010年に四次元放射線治療に関するテーマで学位を取得致しました。その後、放射線治療科医学物理士、2014年から特定講師、2017年から人間健康科学系専攻准教授を経て、現在に至ります。

私がライフワークとしている医学物理士（Medical Physicist）についてご紹介致します。医学物理士とは、国際労働機関の国際標準職分類ISCO-

08において、「理工学に関連する科学的知識を医療の分野、特に放射線医学に適用する職業」と規定されています。この医学物理士はさらに研究医学物理士（Research Medical Physicist）と臨床医学物理士（Clinical Medical Physicist）とに大別されます。

研究医学物理士は、放射線医学の発展に資する研究開発を行います。例えば、臨床現場で使われている放射線治療装置の大半は欧米で開発されたものですが、そこには研究医学物理士が関与しております。

一方、臨床医学物理士は臨床現場において、患者の線量評価や放射線品質管理・品質保証などを担当します。これらはIAEA国際基本安全基準に「臨床医学物理士が行う業務」として挙げられている項目です。欧州各国では、放射線治療装

第77回 京都大学原爆災害
総合研究調査班
遭難者の慰霊

令和4年9月17日（土）に、広島県廿日市市宮浜温泉において、第77回京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の慰霊を自由参拝にて執り行われました。

当日は、ご遺族、廿日市市長、同市議会議員、市役所関係者、廿日市市大野支所長、広島市関係者、広島県大会関係者、芝蘭会広島支部関係者、京都大学からは、岩井研究科長はじめ副研究科長、副病院長、現職教授のほか、医学研究科職員、芝蘭会事務局等52名の参拝者があり、無事に慰霊が執り行なわれました。

京都大学原爆災害
総合研究調査班

京都大学原爆災害総合研究調査班は、1945（昭和20）年8月6日に原子爆弾が投下された広島にいち早く赴き、被爆者の診療及び調査研究を行っていましたが、同年9月17日に西日本を襲った枕崎台風により、滞在先の大野陸軍病院が山津波に見舞われました。この時、理学部、医学部の教官と学生ら約50人で編成された調査班の班員のうち、11名が多くの患者とともに犠牲となりました。



岩井一宏研究科長



松本廿日市市長

ご注意

最近、芝蘭会の方々に芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございません

ので、くれぐれもご注意くださいようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合わせはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMSIFUND) だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
総務企画課企画広報掛
TEL 075-753-4695
075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

数学研究の楽しさと数学の美しさ



KMSIFUND 委員長(2022年)
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授
大森孝一

第15回 校友会総会・講演会

令和4年9月17日(土)に、京都大学医学部記念講堂におきまして、京都大学医学部校友会第15回総会・講演会がオンライン開催されました。

総会の部におきましては、新屋明美校友会会長のご挨拶、岩井一宏医学研究科長・医学部長におかれましては、ご出張の為、ご挨拶を録画で配信されました。その後、京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)の表彰式も、続けて録画で配信されました。

KMYIAは、京都大学医学部教育研究支援基金(KMSIFUND)の支援事業として平成21年に、京都大学医学部に所属する大学院生、研究生等を対象とした表彰制度「京都大学医学部表彰制度」の一つとして設けられたもので、学部学生、大学院生、研究生、研修員等非教員を筆頭者とする優秀論文を選考し表彰するものです。

今回は、臨床研究部門から、呼吸器内科学分野 曾根尚之氏、基礎研究部門から、システム神経生物学分野 細川智永氏、腫瘍生物学分野 佐伯龍之介氏の合計3名(所属は論文掲載時のものです)が選ばれ、岩井医学研究科長・医学部長より、表彰状と副賞の目録(20万円)が授与されました。

続いて、京都大学医学部校友会賞の表彰式が2年ぶりに行われ、準硬式野球部、ESS部、陸上競



ご講演では、「自己紹介」「数学的アイデアの実例」「数学研究と応用」「数学の美しさ」の構成でお話されました。

愛知県名古屋市の先生で、経歴の中で一番印象的なのは大学入学の前後で、大学紛争で東大入試がなかった年に京大を受験し、入学式は1分で終わったとのことでした。

数学的アイデアの実例としては、ガウスの足し算、三平方の定理の補助線による証明をあげられました。

ご自身の研究では、ハットホーン予想の特殊な場合を説明しようとして間違っていることに気づき、もっと強い補題であるBand & Breakを証明していたことを示され、間違えてもへこたれずに細部を吟味することの大切さを強調されました。

数学研究と応用について、フーリエ解析とMRI、リーマン幾何と相対性理論、有限体とコンピュータ通信の符号などについてご説明いただきました。

令和3年度 京都大学医学部 若手研究者優秀論文賞 KMYIA 受賞者の言葉

医学研究科
呼吸器内科分野 医員
(論文掲載時)

曾根尚之

この度は令和3年度京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)を受賞させて頂き、大変光栄に存じます。

御指導頂きました平井豊博教授、後藤慎平教授をはじめ、素晴らしい研究環境と御指導を賜りました教室員の先生方と共同研究で御尽力頂いた先生方に深く御礼申し上げます。

受賞対象となった論文は「iPS細胞とマイクロ流体気道チップ技術を組み合わせた多細胞での線毛病モデルの構築」です。肺は呼吸により外界から病原体や異物までも体内に取り込んでしまうので、線毛上皮細胞は上気道・下気道に侵入した病原体や異物を一方向性に除去する

という重要な機能を担っています。その機能を発揮するには線毛上皮細胞間での協調的な線毛運動が必要ですが、この機能が障害されると病原体や粘液が効率的に排泄されず、気道の閉塞や繰り返す肺炎が引き起こされます。

これまでは、iPS細胞から1細胞レベルでの線毛上皮細胞の機能の再現はできていたましたが、多細胞間の協調運動の構築には至っていませんでした。本研究は、ヒトの生体内に近い状態での培養が可能な「マイクロ流体気道チップ」を用いて、多細胞間の線毛協調運動の制御を試みました。

結果、マイクロ流体気道チップ上で気道上皮幹細胞の段階から液流刺激を与えながら分化誘導すると、多細胞間での協調運動が形成されることが確認できただけでなく、これまでは線毛

上皮細胞への分化誘導には空気と接しながら培養する必要がありと考えられてきましたが、液流刺激を用いると、空気と接していなくても効率的に分化誘導できることを見出しました。また、線毛協調運動の形成には線毛運動そのものが必要と考えられてきましたが、線毛運動が消失している疾患特異的 iPS 細胞由来の気道上皮細胞シートでも、平面内細胞極性が形成されることも発見しました。

これらの成果は、未解明であった胎児期の線毛上皮細胞への分化の仕組みや、多細胞間で線毛運動が協調するメカニズム解明につながる重要な知見であり、線毛機能が障害される疾患の診断や新規治療法の開発に役立つことが期待されます。

末筆ではございますが、栄えある本賞の受賞を励みに、医学の発展に貢献できるように今後

第9回 (2022年度) 京都大学医学部校友会賞について



表彰式には受賞3団体の代表が参加した

令和4年9月17日に「第15回京都大学医学部校友会総会」が開催され、「第9回医学部校友会賞の表彰式」を行いました。

令和3年9月から令和4年8月までを対象として「課外活動報告書」を提出していただき、生活・

課外活動支援委員会
で検討した結果、今年度は、医学部ESS部、医学部陸上競技部、医学部準硬式野球部の3団体に授与することに決まりました。

医学部ESS部は、コロナ禍で活動が制限されているなか、プラクティス活動やオンラインで行い、夏JEMAN YSEにおいて優勝者、上位者を多数輩出されました。

医学部陸上競技部は、webで体調管理を行い、オンラインを活用して交流を深めてモチベーションを向上させ、優秀な成績を収められました。

医学部準硬式野球部は、チームプレイが基本ですが、時間制限のあるなかで、練習メニューを工夫

令和3年度 京都大学医学部若手研究者優秀論文賞 KMYIA 受賞者

【基礎研究部門】

氏名	現所属	論文投稿時の身分	論文題目	掲載誌
曾根 尚之	医学部附属病院 呼吸器内科 医員	呼吸器内科学分野 研究生	Multicellular modeling of cilopathy by combining iPS cells and microfluidic airway-on-a-chip technology	Science Translational Medicine
細川 智永	名古屋大学理学部 生命理学 講師	システム神経薬理学 分野特定研究員	CaMKII activation persistently segregates postsynaptic proteins via liquid phase separation	Nature Neuroscience
佐伯 龍之介	医学専攻 (腫瘍生物学分野) 博士課程 4 回生	医学専攻 (腫瘍生物学分野) 博士課程 3 回生	Combined landscape of single-nucleotide variants and copy number alterations in clonal hematopoiesis	Nature Medicine



受賞者の記念写真(中央左が筆者)

とも精進して参ります。教育研究支援基金にご寄付頂いた皆様に心より感謝致しますとともに、校友会諸氏のますますのご発展を祈念致します。

支部だより

京都

「新型コロナウイルス クラスター対策班」の 奮闘の軌跡と舞台裏

令和4年7月3日（日）、芝蘭会館稲盛ホールにて芝蘭会京都支部総会が開催されました。はじめに、支部長に就任された森洋一先生（写真上）による支部長挨拶、物故会員への黙祷が行われ、その後、野口雅滋先生の進行のもと、会務報告、会計報告、芝蘭会本部報告、京都大学大学院医学研究科内科学専攻消化器内科学専攻の妹尾浩教授から、京大医学部附属病院内の近況について報告が行われました。

その後、京大大学院医学研究科社会健康医学系専攻環境衛生学分野の西浦博教授（写真下）による特別講演が行われました。

新型コロナウイルスによる感染症COVID-19は現在も終息することなく、日本でも多くの感染者・死者が確認されています。そうしたなかで、西浦先生は中国で感染症が確認された

直後の2020年1月から研究を開始し、政府の「新型コロナウイルス感染症対策専門家会議」、厚労省の「新型コロナウイルスクラスター対策班」に参加するなかで、数理統計モデルを用いてウイルスの流行状況の特徴を明らかにされました。人との接触8割減を国に提言した経緯から「8割おじさん」と呼ばれています。

で、1人の感染者が生み出している2次感染者数の平均値」と月日別の感染者数を表すグラフをもとに、京都府における令和4年1月から現時点までのオミクロン株のBA-1、BA-2、BA-5による感染者数、実効再生産数、年齢別感染者数などを多角的に分析し推測すると、今後8月以降に爆発的な感染者数増が見込まれる。

今回の流行が起こる以前は、2009年の新型インフルエンザの際に新型インフルエンザ対策班が施行され、課題や教訓を踏まえた行動計画やガイドラインが整備されていた。しかし、今回のように新しい感染症が突然に出現した際の現実的な対応策は二つしかない。①封じ込め（containment）：できるだけソースに近いところで徹底的に叩く、②緩和（mitigation）：流行のインパクトを緩和する、遅らせる）である。

2020年2月のダイヤモンド・プリンセス号の状況などをみると、この感染症に丸腰で対応すると重症者が増え続け、ベッド数が足りなくなる「医療崩壊」が起こる危険性が生じたため、日本を含め多くの先進国で取られた政策が「抑制」である。ハンマー&ダンスと呼ぶ抑

制策をうまく使い分けて時間稼ぎをして、感染拡大を最小限に抑え、我々専門家は事後評価とリアルタイムでの評価を走りながら提供して次に繋げていったのである。

具体的には第1波の2020年の3月下旬に、東京では夜間の飲食制限や感染爆発重大局面など、毎日のように都民に流行対策が呼びかけられた。個々の対策とリスクの周知によって実効再生産数は1を割り、同年4月7日に第1回目の緊急事態宣言が発出されると、その日を境に実効再生産数がさらに落ちて、宣言期間中は低い数字が維持され感染者数は激減した。同時期に大阪でも、夜間の飲食制限、週末の外出自粛要請などにより感染者数は減少した。

しかし、緊急事態宣言が解除されると、ハイリスクな人たちの間で伝播が再開した。そこで、第2波が到来するとすぐに、すでにカスタマイズされたハイ

リスクな空間・場所を国民に周知して理解を求めた（4人以上の会食自粛要請、夜間の営業自粛要請）。これにより、緊急事態宣言を発出することなくハイリスクの伝播を抑え込むことができた。さらに第3波の到来をできるだけ遅らせる提案をして、実効再生産数を減じることができた。このことは、のちのまん延防止等重点措置適用の素地になっている。

その裏側では、以上の対策がどのような効果をもたらしたのかを走りながらデータ分析してフィードバックし、社会活動に大きな負荷がかかりすぎないよう、非特異的な政策でハンマー&ダンスを繰り返した。水面下では我々専門家が描いたデザインをもとに官邸や内閣官房との激しい交渉を繰り返しながら政策を展開してきたのである。

一方で、カスタマイズした対策を講じるのは日本の特色である。クラスターが発生する可能

性が高いのは、狭い空間で向かい合ったり、大きな声を出したりするときで、呼吸数が早くなるとエアロゾル拡散の危険が大きくなるという正解に、いち早く辿りついたのが日本である。

専門家会議で盛んに議論したのは、感染リスクの濃淡である。我々専門家は行政に対して科学者の立場をとり、特定の人たちだけが不利を被ることのないよう、何らかの形で折り合いをつける制度を作ってもらえないかと進言した。国民に対しても、リスクの濃淡が明確であることに気づいてもらうよう努力してきた。

このことは我々の研究面にも関わることである。ハイリスクな接触を経験する人たち（ここでは流行が起こる焦点となる人達をいう）からの伝播を何%まで下げられるかによって、次の波の到来の時期を推定できるのである。

だが、第1波の時期に第2波の到来時期の話をすると、「いたずらに世の中を扇動している」などと一部の週刊誌に叩かれたりもした。しかし、科学的にはどう考えても、第1波の次に対応すべきはハイリスクの伝播対応であり、第2波の到来時にハイリスク対策を講じたことは適切であったと考えている。

日本は、「抑制」という政策をとったことで、死亡者数やGDPの低下率はOECD加盟国でもっとも低くなっているが、これはあくまで一時的な話である。今後のオミクロンBA-5や新たな変異株による流行に対してどのような政策をとるかは、専門家による感染者数の想定を踏まえて、国は価値判断や国民感情を考慮した政策を展開していくことになる。

以上の講演のあと、主にワクチンに関する質疑応答があり、特別講演は終了となりました。（文責・芝蘭会事務局）

三重

代謝・機能状態を 同時に可視化する 核医学画像の可能性

令和4年9月4日（日）、津駅前のアスト津にて、令和4年度芝蘭会三重支部総会が開催されました。はじめに芝蘭会三重支部事務局の井上貴博先生より挨拶があった後、井上先生の進行のもとで、芝蘭会三重支部総会が進められました。会員状況の報告・確認、役員の変更や会計についての報告がありました。また、今回の総会の日時と場所が伝えられました。

次に、京都大学大学院医学研究科画像診断学・核医学講座教授の中裕士先生によって、京都大学医学部の近況報告がありました。現在の役員や新任教授のご紹介、受賞に関するお話、がん免疫総合研究センターBristol Myers Squibb棟が建設中であること、京大病院がYouTubeに疾患啓発動画を発表していること、さらには京大病院と北山の洋菓子店マールブランシュとの合作でお菓子が開発されたことなどを教えていただきました。

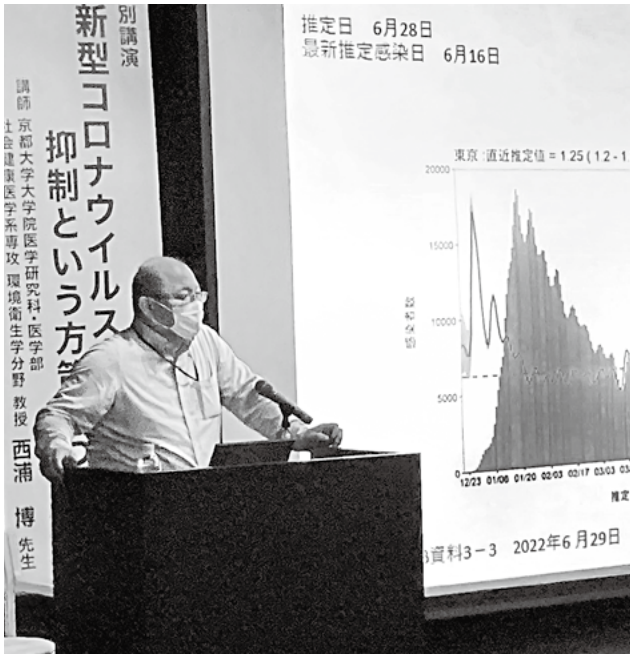
その後、「核医学的手法を用いた画像診断と治療・神経内分分泌腫瘍・前立腺癌を中心に」というタイトルのもとに中本先生の学術講演が行われました。その内容は、①画像診断について、②Theranosticsとは？、③現状の課題と将来展望、という三部構成でした。

中本先生はじめに、画像診断とは何かについてお話しくださいました。画像診断は、生命活動に関して評価したい情報を、科学技術の力で非侵襲的に可視化し、臨床に役立てるためにあり、その画像は医用工学の力で作られます。医用工学の進歩とともに、画像の形式や精度などは変化し、時代とともに常識や

エビデンスも変わり続けることでした。これまでの画像診断は、形態を画像化するCTやMRIが主流でしたが、代謝・機能状態を画像化する核医学画像の重要性も高まっており、今世紀に入ってから形態と機能を同時に画像化できる複合型の画像診断装置が導入され、両者の情報を容易に評価できるようになっているそうです。

続いて先生は、Theranosticsについてお話しされました。Theranosticsは、治療を意味するTherapeuticsと、診断を意味するDiagnosticsからなる造語で、狭義においては、一つの担体に治療の機能と診断的機能を持たせるという意味です。

が、よりの確な治療につなげるために診断的方法を併用するという広い意味も含蓄するようです。Theranosticsは今世紀に入ってきた比較的新しい言葉ではあるものの、核医学の分野では古くから行われてきた概念であることと、甲状腺癌に対するI-131内照射療法の話に始まり、神経内分泌腫瘍や前立腺癌に対する最近の画像診断と治療の具体的な例をわかりやすく説明してくださいました。今後はケモカイン受容体や繊維芽細胞活性化タンパク質を標的とする放射性医薬品を用いて、診断と治療が行われる可能性も期待されていることとです。最後は、現状の課題と将来展



望についてでした。日本は欧米のみならず、アジアの諸外国からもこの領域の遅れをとっており、日本から海外に治療を受けに行っているという現状があります。何が原因と簡単なものではないなそう、放射性物質に対する規制が厳しいこと、経済低迷にともなう予算削減、充足した生活ができるようになったハングリー精神の相対的欠如など、様々な要因があるのかもしれない。いずれにしても本邦での医学研究が後れつつあり、諸外国と比べて論文数が減少している現状に目を背けてはならず、産官学連携の上での新しい展開が我が国を衰退させないために重要ではないかと改めて痛感しました。

講演終了後は写真撮影がありました。そこで、先生方が私たち学生にも話しかけてくださり、現在の大学の様子や、新しくなったカリキュラムなどについて興味を持たれる一方、先生方の昔の大学の様子についてもお話ししていただきました。

講演会後には懇親会が予定されていたものの、大学および大塚病院の方針があり、私たちや中本先生は食事に参加できず残念でしたが、様々な意見交換ができ、楽しい経験となりました。(文責・2回生 山本 誠)

続いて、福井大学学術研究院医学系部門環境保健学の平工雄介教授が「産業化学物質による呼吸器疾患の分子機構」というタイトルで研究発表をしてくださいました。

平工教授は、産業化学物質による健康障害の代表例として、次の3つの事例を挙げ、個々の健康障害について具体的な説明をしてくださいました。

①兵庫県尼崎市で発生したアスベスト飛散による中皮腫。
②研磨作業に従事していた作業者がインジウムによる間質性肺炎を発症。
③大阪市の印刷工場の作業者が、12-ジクロロプロパンとシクロロメタンによる胆管癌を発症。

④福井市の化学工場で作業者が相次いでオルトトリルイジンによって膀胱癌を発症。

結語として、「これまで種々の産業化学物質による発がんなどの疫病(特に炎症反応を介する)分子機構を明らかにした。今後も、これらの疫病のリスク評価や予防につながる研究を展開していきたい」とおっしゃっていました。平工教授の発表をうかがい、環境問題についての関心が高まりました。

その後、京大大学院医学研究科生体情報科学講座の渡邊大教授より、「認知的柔軟性の基盤となる脳の仕組み」というタイトルの特別講演がありました。

研究目的は、複雑な認知機能を可能にするネットワークの動作原理の解明です。それにより、予測に基づく行動選択の認知プロセスである意思決定と、言語のような高度の能力の獲得メカニズムである社会学習の獲得をめざします。また、上記の脳機能と関係する精神神経疾患の病態理解、治療法の開発をするこ

とも研究の目的であるとのことでした。それぞれの課題について興味深い例を用いてわかりやすく解説してくださいました。

最後に、渡邊先生より京大医学部の近況報告がありました。現在の人事のご紹介につき、建設中の医学研究科が免疫疫学総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟や、京大病院の現状などについても説明してくださいました。

講演終了後、写真撮影をしました。先生方は私たち学生にも話しかけてくださり、現在の大学の様子や新しくなっ

たカリキュラムなどについて興味をもつてご質問いただきました。また、先生方の学生時代の大学の様子をお聞かせいただくなど、様々なお話ができて良い経験となりました。(文責・2回生 山本 誠)

令和4年11月5日(土)、松山市のサンラボむらくもにて、令和4年度芝蘭会島根支部総会が開催されました。はじめに芝蘭会島根支部長の森本紀彦先生よりご挨拶をいただいた後、池田登先生の進行のもと、支部総会が行われました。会員報告・確認、役員の変更に関する報告、及び次回開催地と開催時期のお知らせがありました。

続いて、京都大学大学院医学研究科形成外科科学教授の森本尚樹先生より、京大医学部に關する近況報告がありました。現在の医学部附属病院の運営体制、役員及び新任教授のご紹介、各種受賞者の報告や、建設中であるがん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟の紹介のほか、YouTubeを活用した京大病院の疾患啓発動画配信や、教育改革への取り組みなどについてお話しくださいました。

その後、「人工真皮、培養表皮を用いた皮膚再生」というタイトルで、森本先生より医学特別講演が行われました。

まず、皮膚の基本的な構造とその再生に関してお話しくださいました。皮膚は大きく表皮、真皮、皮下組織に分類されます。表皮と皮下組織は、培養表皮や脂肪移植、脂肪幹細胞移植などによってほぼ再生可能となっていますが、真皮は、人工真皮や同種皮膚を用いても再生できないのが現状です。

再生医療の3要素として、足場、細胞、細胞成長因子が一般に挙げられますが、皮膚再生におけるこの3点について、より詳しくお話を伺いました。

① 足場
組織再生の足場となるのが二層性人工真皮です。日本ではペルナック、テルダーミス、インテグラが使用可能です。それぞれの特徴について、肉芽形成の速度や生着率、拘縮の強さや肥厚の程度といった治癒過程の観点からご説明いただきました。

現時点で、どの人工真皮が優れているかという評価は未確定ですが、臨床現場では潰瘍の性質ごとに適用が決まり、難治性潰瘍の場合は、細胞成長因子であるフィブラストスプレーを併用して治癒促進が図られることもあるようです。これらに加えて、二层的植皮や植皮に伴う合併症に関しても教えていただきました。

② 細胞成長因子
次に、ペルナックGプラスと

最後に、再生医療の3要素のうちの細胞にあたる自家培養表皮を用いた、先天性巨大色素性母斑の治療に関して、実際に先生が治療された症例を交えながらお話しくださいました。

この母斑の問題点としては、整容的な点と、母斑から悪性黒色腫発生の可能性がある点が挙げられます。標準治療は外科的切除で、その際に生じた皮膚欠損部の再生に対して自家培養表皮が用いられます。

自家培養表皮とは、自家のヒト組織細胞を組み込んだ再生医療製品で、患者皮膚より単離した表皮細胞を培養して表皮のみのシートが作成されます。2万人に1人という希少疾患ですが、京大病院では多くの症例の治療が行われているようです。

質疑応答の時間には多くの先生方がご質問され、最新の研究動向や今後の展望に関してもより深いお話を伺えました。

講演終了後は写真撮影があり、私たち学生も参加させていただきました。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、今回は講演会後の懇親会はなく残念でしたが、講演終了後も多くの先生方が意見交換をしておられる姿を見ることができました。

(文責・5回生 青木 ちひろ)



島根

皮膚再生の最前線の情報をめぐり、 活発な議論を展開

(文責・2回生 山本 誠)



表皮を用いた皮膚再生
学術研究科 森本 尚樹

フィブラストスプレーについてお話しいただきました。ペルナックGプラスとは、上述のペルナックのスポンジ部分を、コラーゲン100%からコラーゲン90%+ゼラチン10%に変更したものです。この変更により、フィブラストの吸着がより良くなることともに、フィブラストを10日間程度徐放し、既存の人工真皮よりも治癒のスピードが数倍早くなることがわかっております。現在は、ペルナックGプラスとフィブラストスプレーのコンビネーション製品の開発が行われているそうです。

③ 細胞
最後に、再生医療の3要素のうちの細胞にあたる自家培養表皮を用いた、先天性巨大色素性母斑の治療に関して、実際に先生が治療された症例を交えながらお話しくださいました。

この母斑の問題点としては、整容的な点と、母斑から悪性黒色腫発生の可能性がある点が挙げられます。標準治療は外科的切除で、その際に生じた皮膚欠損部の再生に対して自家培養表皮が用いられます。

自家培養表皮とは、自家のヒト組織細胞を組み込んだ再生医療製品で、患者皮膚より単離した表皮細胞を培養して表皮のみのシートが作成されます。2万人に1人という希少疾患ですが、京大病院では多くの症例の治療が行われているようです。

質疑応答の時間には多くの先生方がご質問され、最新の研究動向や今後の展望に関してもより深いお話を伺えました。

講演終了後は写真撮影があり、私たち学生も参加させていただきました。新型コロナウィルス感染拡大の影響により、今回は講演会後の懇親会はなく残念でしたが、講演終了後も多くの先生方が意見交換をしておられる姿を見ることができました。

(文責・5回生 青木 ちひろ)

75回・2022（令和4）年版 「芝蘭会会員名簿」を 刊行しました

名簿作成にご協力いただき、ありがとうございました。
この度、令和4年11月末に「芝蘭会会員名簿」を刊行いたしました。
名簿作成にあたり、会員の皆様から快く異動情報等をお寄せいただき、感謝申し上げます。

- 会員名簿：A4 判、813 頁
- 会員頒布代：1 部 5,500 円（消費税を含む）
※但し、会費納入者に限る。その他は 11,000 円（税込）
- 送料：900 円

会員名簿をご希望の方は
芝蘭会事務局（075-751-2713）まで
お問い合わせ下さい。

訂正とお詫び

令和4年11月末に刊行致しました75回・2022（令和4）年版「芝蘭会会員名簿」に誤りがありました。会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びするとともに、次のとおり訂正いたします。

P 179 内田 邦子

【誤】 昭和 45（1970）年卒業

【正】 昭和 44（1969）年卒業

P 630 芝蘭会支部：香川支部

【誤】 副支部長 門脇 則光

【正】 副支部長 真弓 哲二 門脇 則光

令和 4 年度

「医学部学生の海外等研修助成」および「教養体育活動助成」 募集を再開しました

芝蘭会では医学部学生がグローバルに活躍できる医師、研究者になるために、有能でモチベーションの高い学生への海外研修に要する経費を援助しています。また、医学部傘下の教養体育公認団体に対し活動経費を援助しています。

令和2年度及び3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により募集しませんでした。令和4年度において募集を再開しました。

*申請方法などの詳細は、芝蘭会ホームページ「芝蘭会の事業」をご参照ください。

マイコースプログラム

4 回生の自主研修期間に、海外の大学等での研修に要する経費を助成します。

*渡航費、滞在費等含めて 10 万円。令和4年度は 15 名の申請あり。

病院実習

臨床実習後半のイレクティブ実習期間に、学生が自主的に選択した海外の医療機関・教育機関での実習に要する経費を助成します。

*渡航費、滞在費等含めて 10 万円。令和4年度は 5 名の申請あり。

医学部傘下の教養体育公認団体

活動実績に応じて器具購入費や交通費等を助成します。

*1 団体あたり 5 万円。令和4年度は 17 団体の申請あり。



京大医学部臨床研究棟から望む医学部構内。手前は先端医療研究開発機構（IACT）

人事異動

R4.9.30	稲垣 暢也	辞任	糖尿病・内分泌・栄養内科学教授 ➡公益財団法人田附興風会理事長
R4.9.30	河田 健二	辞任	消化管外科学准教授 ➡ 倉敷中央病院外科部長
R4.9.30	魚住 龍史	辞任	先端医療研究開発機構講師 ➡ 東京工業大学准教授
R4.10.1	中村 光宏	昇任	人間健康科学系専攻総合医療科学理工系医療科学医学物理学准教授 ➡ 同教授
R4.10.1	益田 勝吉	採用	サントリーグローバルイノベーションセンター研究員 ➡ 人間健康科学系専攻食と健康科学研究講座特定教授
R4.10.1	荒木 望嗣	採用	人間健康科学系専攻先端基盤看護科学講座特定准教授 ➡ 同専攻食と健康科学研究講座特定准教授
R4.10.1	岩田 浩明	採用	人間健康科学系専攻先端基盤看護科学講座特定准教授 ➡ 同専攻食と健康科学研究講座特定准教授
R4.10.1	尾上 浩隆	採用	脳機能総合研究センター研究員（非常勤）、 医学研究科神経生物学研究員（非常勤） ➡ 同センター特定教授

R4.10.1	島村 達郎	昇任	分子細胞情報学特定講師 ➡ 同特定准教授
R4.10.1	肥田 侯矢	昇任	消化管外科学講師 ➡ 同准教授
R4.10.31	山本 典生	辞任	耳鼻咽喉科・頭頸部外科准教授 ➡ 地方独立行政法人神戸市民病院機構神戸市立医療センター 中央市民病院耳鼻咽喉科部長
R4.11.1	奥田 裕子	採用	疼痛疾患創薬科学講座（産学共同）特定准教授 ➡ 附属医学教育・国際化推進センター（国際化推進部門）特定准教授
R4.11.1	手塚 徹	採用	疼痛疾患創薬科学講座（産学共同）特定講師より ➡ 附属医学教育・国際化推進センター（国際化推進部門）特定講師
R4.11.1	岸本 曜	昇任	耳鼻咽喉科・頭頸部外科助教 ➡ 同講師
R4.12.1	久森 重夫	昇任	消化管外科学助教 ➡ 同講師

謹んでご冥福をお祈りいたします

加藤 和夫	昭和 18 年専卒	令和元年
滝 長次	昭和 19 年卒	令和 4 年 3 月
中島 砂	昭和 22 年卒	令和 3 年
山中 康正	昭和 23 年専卒	令和 4 年 10 月 30 日
伊豆蔵 健	昭和 24 年卒	
曾 柳村	昭和 24 年卒	令和 4 年 11 月 26 日
藤岡 三郎	昭和 24 年卒	
森井 外吉	昭和 24 年卒	令和 4 年 6 月 29 日
松島 龍太郎	昭和 25 年専卒	令和 4 年 10 月 4 日
水島 淳	昭和 25 年専卒	
坂上 弥栄	昭和 26 年専卒	
笠原 閑	昭和 26 年業卒	平成 1 6 年 8 月
弘井 泰夫	昭和 27 年卒	令和 3 年 9 月 20 日

井上 敬四郎	昭和 28 年卒	令和 4 年
菊池 徹	昭和 28 年業卒	令和 4 年 8 月
樽谷 嘉彦	昭和 28 年業卒	令和 4 年 1 月
三好 豊二	昭和 33 年卒	
池田 公行	昭和 35 年卒	令和 4 年 7 月 12 日
山本 博昭	昭和 36 年卒	令和 4 年 7 月 2 日
児玉 宏	昭和 37 年卒	令和 4 年 12 月 12 日
丹羽 耕三	昭和 37 年卒	
野村 繁雄	昭和 38 年卒	令和 4 年 1 月 11 日
田中 徹	昭和 40 年卒	令和 4 年 8 月 10 日
中本 征利	昭和 41 年卒	令和 4 年 10 月 20 日
八木 伸也	昭和 44 年卒	
島野 尚志	昭和 46 年卒	令和 2 年 2 月 3 日

姜 一龍	昭和 47 院	令和 4 年 10 月 18 日
水野 恵文	昭和 49 年卒	令和 4 年 6 月 21 日
安部 秀斉	平成 5 年卒	令和 3 年 2 月 19 日
高橋 剛士	平成 10 年卒	令和 3 年 7 月 13 日
岡澤 好子	教室会員 放射線遺伝学	令和 3 年 8 月 12 日
木下 順子	教室会員 内 1	令和 4 年 3 月 5 日
木口 保之介	教室会員 内 1	令和 4 年 3 月 9 日
岸本 達也	教室会員 眼科	令和 3 年 11 月 11 日
福原文雄	教室会員 小児科	令和 2 年 10 月 7 日
恒川 潤一	教室会員 耳鼻科	平成 26 年 12 月 6 日
儀間 義威	教室会員 胸部研	令和 3 年 9 月 21 日

事務局から

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。
FAX 075-752-4015

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であり、支那活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、送付先はFAX（075-752-4015）またはE-mail（info@shinkai.co.jp）をお願い致します。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会が決めさせていただきます。

芝蘭会報編集委員会

委員長 高折晃史

委員 中村保幸、吉岡秀幸、

清川岳彦、園部誠、松村由美、

甲斐亜沙子、諫田淳也

芝蘭会雑誌部

顧問 高折晃史

部員

（6 回生）岡和来、西村健太、
秋宗俊久、原明弘、森田瑛、

吉村太貴、権井良太郎、濱田草太

（5 回生）奥野芳樹、青木ちひろ、

福井貞孝

（4 回生）三宅大河、小林空暉、

小澤向陽、野洲春菜

（3 回生）大島輝

（2 回生）福田大智、反田武志、

山本誠

（1 回生）奥村圭一郎、田中春輝

芝蘭会事務局

事務局長 山田均

管理課長 森勝二

総務課 秋山和美

制作協力 京都通信社

デザイン 納富進